

# 真夏のダンス部、 熱き戦い!

文 石原久佳

## 多様化するダンス部大会

「ダンス甲子園」と言えば、20数年前にストリートダンスブームの発火点となったテレビ番組の伝説コーナーだが、まさにこの夏のダンス部たちの戦いはそう呼べるものだった。毎年数々のドラマやスターを生むのは高校野球の甲子園だが、女子たちにとつての甲子園は今や「ダンス部大会」であり、その頂点を目指す戦いには出場校分のドラマがたつぷりと詰め込まれている。

今シーズンの主要大会を振り返ってみよう。6月下旬に行なわれた第3回を迎える「日本ダンス大会」では、ビデオ審査を通過した高校ダンス部50チームが競い合う。関東勢が中心の出場だったが、軽快なPOPSビートに力強い「ダンスダンスを乗せた京都文教高校が優勝。また、同大会ではプロによる多くのエキシビジョンやワークショップが用意されており、大

の部門、2部制で行なう「高校生ライブMUSIC DAYS」も年々盛り上がりを見せている。また、全日本小中学生ダンスコンクールは他と趣向を変え、小学校の学級単位で参加できる部門を設ける。レベルではなく、「一般層や低年齢層へのダンス文化・ダンス教育の」広がり、「を強く感じさせる大会となっている。裾野が広がれば山の頂点は高くなり、その逆もしかり。さまざまな学生がダンスに取り組める各大会のあり方こそが、部活ダンス・教育ダンスの活性化につながっていくのだ。

## 審査基準と西高東低

各大会の入賞校は意外とバラバラだ。結果には運も出場校のラインナップもあるだろうが、この違いは審査基準の違いでもあるのだから。前述の「日本ダンス大会」は教育的側面や協調性を審査基準に加え、「DCC」は漢字二文字のテーマ性の表現を重視、「ダンススタジアム」はビジュアル・エンターテインメント・テクニック・音楽・スペシャリティーの5分野を10段階で評価している。各大会を主催するダンス協会が設定した審査基準のため、なかなか足並みを揃えるのは難しく、加えてダンサー審査員の得意ジャンルや、非ダンサー審査員のダンスへの理解度などによってもバラつきが出るだろう。強豪出場校に話を聞くと、大会の審査傾向を読んで「勝ちに行く」出場の選択をするともいう。今後は、各大会がその審査基準や審査員の人選をより明確にすることが、



▲写真はすべて8/18開催ダンススタジアム ビッグクラス決勝の様様。

会参加をダンスの学びの場にしようという意図が見られる。

夏のビッグイベントation内で代々木第二体育館にて行なわれる「DANCE CLUB CHAMPIONSHIP Vol.3 (DCC)」は、雰囲気と演出がひととき華やかで、漢字二文字のテーマ表現が審査基準に盛り込まれていることも特徴だ。ここでは「修羅」をテーマに、派手なメイクとパワフルなムーブ、高い組織力が評価された久米田高校(大阪)が優勝。本誌前号で紹介した山村学園高校(埼玉)も、高い身体能力とコミカルな演出で準優勝を飾った。

まさに「ダンス甲子園」と呼べる規模と熱気で、今年8回目を迎えるのが「日本高校ダンス部選手権(ダンススタジアム)」。全国7カ所12日間に渡り予選が行なわれ、高校部門で370校7461人が出場、総観客動員数25310人という最大規模の大会だ。9人以下のスモールクラスでは、なまりきりビヨッセで会場を沸かせた精華女子高校(福岡)、「ビッグクラスでは80年代のエプロビをモチーフにエンタメ感たっぷりの登美丘高校(大阪)が優勝と、パロディのキャッチーさを自力のダンス力に活かした両チームが事実上の日本一をつかんだ。

それ以外にも、関東近郊のダンス部が参加する「高校生ダンスコンテスト『DANCE IN MOTION』」が夏休み期間に開催され、ダンス部同様に女子の人口が増加する軽音楽部の部門とダンス部出場者と全体のメリットにつながっていくように思われる。

審査基準のバラつきや不明瞭さはダンス部だけでなく、ダンス界が長年抱える問題だ。元々がストリート文化の発祥であり、競技としての歴史も浅いだけに、そう簡単には解決することはないだろうが、ダンスの質においてもストリートダンス界と同様、いやそれ以上の傾向がダンス部にはある。それは「西高東低」。先の大大会の入賞校を見ても、ほとんどが西日本おもに関西勢のレベルが高いのだ。ダンスにはPOP、LOCK、BREAKのオールドスクールというジャンルがあるが、関西勢は総じてそのレベルが高く、音楽で言うところの強力なリズムやグルーヴを武器に演奏しているチームと言える。逆に関東勢は華やかなアレンジや演出が得意。ここ数年は関西のパワーに押され気味だが、今年の大会では関西の「POPS勢」が「ネタのカブリ」を起こしていたところもあり、今後はより一層の東西のせめぎ合いに期待したい。また、地域による土地柄や校風による伝統がチームの個性として目立ってくる。より一般層が楽しめる要素が増えてくるだろう。

先ほどの通り、他の競技のように様々なダンスコンテストが一定の審査基準を共有することは現実的に難しい。逆に、各大会の特色や審査傾向が、さまざまなダンス表現や取り組み方を触発し、各大会が手を取り合って、全体として「ダンス甲子園」を作る意識こそが、部活ダンサーの未来をサポートするのではないだろうか。